

# スポーツのチカラ



▲タンザニアを去る際、選手たちに最後の言葉を贈る友成さん

2021年夏、東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。新型コロナウイルス感染症のため、昨年から延期された国際的なこのイベントを楽しみにしている人も多いのではないのでしょうか。

また当地域では2026年に開催される「第20回アジア競技大会」のホストタウンとして準備が始まっています。

オリンピック憲章では、スポーツには友情、連帯、フェアプレー精神とともに、相互理解が求められることから、「人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会」の構築に役割を果たすことができると記されています。またスポーツをすることは「権利」であり、人種、肌の色、性別、性的指向、言語、身分等によるいかなる差別をも受けることなく、尊重されなければならないとされています。

スポーツのもつ「チカラ」とは何でしょうか？

今回の特集では、スポーツをとりまく人々をさまざまな角度から取り上げます。

## 「IMAGINE ONE ASIA ここで、ひとつに。」

第20回アジア競技大会(2026年9月19日(土)～10月4日(日))は、アジア・オリンピック評議会(OCA)が主催し、OCAに加盟する45の国と地域からトップアスリートが参加する大会です。アジア最大のスポーツの祭典で、原則4年に1回開催されます。オリンピック競技に加え、普段なかなか見ることができないアジアならではの競技(カバディ、セパタクローなど)があります。



大会に関する情報は、こちらをご確認ください。

## スポーツとSDGs

スポーツはSDGs\*を達成するために重要な鍵を握っています。国連広報センターは、スポーツとSDGsの関係について17の目標ごとにまとめていますが、ここでは主な7つの目標を取り上げます。



\*2015年に国連で採択された持続可能な17の開発目標



### 1 貧困をなくそう

社会・雇用・生活面でのスキルを教えたり実践したりする手段としてスポーツを用いることができます。



### 3 すべての人に健康と福祉を

運動やスポーツはアクティブなライフスタイルや精神的な安定をもたらし、心身の健康に寄与します。



### 4 質の高い教育をみんなに

体育やスポーツ活動は学校教育システムにおいて学生の就学率や出席率、成績の向上に貢献します。



### 5 ジェンダー平等を実現しよう

スポーツを中心とするプログラムや取り組みは、女性や女兒にとって社会進出する契機となります。



### 10 人や国の不平等をなくそう

スポーツはその好感度の高さや人気という特性により不平等解消に取り組むツールとして適しています。



### 16 平和と公正をすべての人に

スポーツイベント等は交流の機会を提供し、相互理解や和解、平和構築を推進する役割を担います。



### 17 パートナーシップで目標を達成しよう

途上国と日本の政府機関やスポーツ団体、民間企業や非営利組織と連携しながら、目標達成に取り組みます。

(参考：一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構ウェブサイト)



## スポーツと開発

### アフリカで野球を通じた人づくり

一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構  
ともなり 友成 晋也さん

今から25年前、独立行政法人国際協力機構(JICA)の職員としてガーナに赴任して以来、友成晋也さんは、アフリカの大地で人々と共に、野球と向き合ってきました。

当時ガーナにあったのは、中学生レベルの自称「ガーナナショナル野球チーム」でした。チームの目標は、「オリンピック出場」だったので、野球経験が豊富な友成さんに白羽の矢が立ち、離任までの3年間仕事以外の時間のほとんどを、コーチ、監督としてグラウンド



▲日本から届いたタンザニアナショナルチームのユニフォームをお披露目

で費やしました。レベルアップしたチームはシドニーオリンピック予選でなんと準決勝まで進みました。その時のキャプテンの一言「野球があったから頑張れた。Baseball is my life」が友成さんをアフリカ野球への道に導いていきます。「国際協力は、衣食住や衛生などのBHN(ベーシックヒューマンニーズ)が基本で、スポーツは遊びの延長」と受け止められていた当時、プライベートタイムとはいえ、野球に時間を割くことに迷いをもっていた友成さんは「人はパンのみにて生きるにあらず。野球は彼らに生きがいをもたらした」と実感します。同時に「スポーツと途上国の開発」が繋がった瞬間でした。

### ●アフリカで甲子園

ある少年野球大会でのことです。小学生の一人に「野球好きか?」と声をかけるともちろん答えはYes。「どうして?」



▲子供たちに野球を教える(紛争地、南スーダンにて)

「バッターボックスのあの四角が好き」。さらに「その理由は?」。「バッターボックスでは敵も味方も全員が僕に注目して、応援し

てくれてヒーローになれる。それにバッターボックスに入るチャンスはみんなに平等に与えられるからね。

一人でも多くの子どもにバッターボックスに立ってほしいと心から願った友成さんは、2003年に帰国しNPO法人「アフリカ野球友の会」を立ち上げます。多くの賛同者から寄付を募り、中古の野球道具を送ったり、アフリカから野球少年少女や指導者を招いたりするなど、野球の普及と人材育成に心血を注ぎました。サッカーに比べて道具を揃えなくてはならない野球は、アフリカでは裕福なスポーツと考えられていて普及していなかったため、ボール一つあれば楽しめる「アフリカ三角ベースプロジェクト」を立ち上げ、アフリカ8か国で展開しました。また、2008年の北京大会を最後にオリンピック種目から野球が消えて、目標を失ったアフリカの選手たちのために「ガーナ甲子園プロジェクト」を立ち上げました。在ガーナ日本大使館がODAの草の根文化無償資金協力により、本格的な野球場を作ることになり、その球場の名前を「ガーナ甲子園球場」と命名しました。その後タンザニアにも展開し、全国大会開催に至りました。

### ●日本野球のスピリッツを

友成さんがアフリカで伝えてきたのはBaseballではなく、日本の「野球道」だと言います。ガーナでは、野球に打ち込んだ子どもたちは例外なく成績が上がりました。なぜなら、野球を通して技術や楽しさだけではなく、「規律(Discipline)」「尊敬(Respect)」「正義(Justice)」、つまり「規律、社会性、協調性」を身につけ、そして何より自信を持てるようになったからです。



途上国では、日本で当たり前にある「体育」や「音楽」などの情操教育の余裕はありません。友成さんはその後赴任したタンザニアで政府に掛け合い、野球を通して、その国の担い手として社会を変えていく人材を育てていくことができることを訴え、地方の学校でも次々と野球部を設立しました。

「スポーツの力はその国の発展に欠かせない人づくり」という信念のもと、友成さんは、今年、新たに財団を立ち上げ、さらに野球を通じたアフリカの未来にまい進し続けます。

## 栄東まちづくりの会

スポーツは地域がつながるきっかけのひとつともなりえます。名古屋市中区は市内で港区に次いで外国人が多く、なかでも飲食店が連なる栄東地区は、フィリピン人をはじめ多くの外国人が働いています。ここで、2001年からバスケットボールを通して外国人と地域住民が連帯をはかることで安心・安全な地域づくりを旨とする「3by3」(東京オリンピックで新種目となった3人制バスケットボール)プロジェクトが取り組まれてきました。



このプロジェクトに取り組むのは、栄東まちづくりの会。顧問の臼井秀明さんによると多くの外国人が仕事帰りに集まる「イ

ケダコーエン(池田公園)」は、フィリピン人コミュニティの「聖地」ともいわれるほど全国的に知られている場所です。住民と外国人との関係がぎくしゃくするなかで、フィリピンの国技として親しまれているバスケの大会を、「顔の見える関係」のきっかけにしたいと、池田公園で開催される夏祭りのメインイベントとして始めました。

大会には、日本人と外国人、シニア、小学生などさまざまな人からなる約20チームがトーナメント方式で戦います。「初めての大会では、深夜まで働いている外国人の若者たちが寝坊して時間になっても現れないなど、主催者としてやきもきしたことが忘れられません」と臼井さんは振り返ります。大会の運営は苦勞の連続でしたが、いったん試合が始まるとプレーしている選手たちはもち

ろんのこと、観客たちも、国籍の垣根を越えてナイスプレーに賞賛の声や拍手を送り合います。このイベントは夏の恒例行事として、今は



日本人、外国人問わず多くのチームが楽しみにしています。運営する地元の人々と参加する外国人の間に仲間意識が生まれ、町中ですれ違ったときは声をかけ合う風景も見られます。臼井さんは大会終了後もチーム同士で連絡先を交換し合って関係を深めてほしいと、次のステップにつなげることを考えていきたいそうです。

写真はいずれも2019年の大会の様子

## 共に闘う一支援者

### 中日ドラゴンズ通訳 児玉 健さん



普段、表に出なくてもその背後でスポーツを支えている人たちの存在があります。中日ドラゴンズで外国人選手やコーチの通訳として、「縁の下の力」を発揮している児玉健さんは弱冠二十歳です。父親は日本人、母親がメキシコ人の家庭で、日本で生まれたときからスペイン語に接する環境で育ちました。高校時代、名古屋ドームでのアルバイトでドラゴンズの選手たちと接する機会があり、そこで児玉さんの語学力や人柄がベテラン通訳の目に止まりました。高校卒業後、スペイン語と英語をあらためて学ぶため、メキシコに留学して語学に磨きをかけ、帰国後中日ドラゴンズの通訳として採用されました。「今度、アメリカから打撃コーチが来るので、その通訳をやってみないか」と声をかけてもらったときは天にも昇る気持ちでした。2年目の今は一軍の打撃コーチとなった、アロンゾ・パウエル氏\*専属の英語通訳として活躍しています。

児玉さんは「この仕事の難しさは相手が次に何を言うかを先読みする必要があること。そのためには、相手のことを理解しておかなくてはなりません。そうすることで、自分にも余裕ができて通訳の仕方も幅がでます」と十分な準備を心がけています。



▲グラウンドにてパウエルコーチと

信頼関係を作ることも大切です。球団から言われているわけではないですがプライベートでもコーチと生活を共にすることが多く、沖縄キャンプでは、寝室以外はいつも側についてサポートをしています。昨年12月に来日したパウエル夫人は日本語ができないので、必要なときは児玉さんのお母さんが買い物などに付き添うなど家族ぐるみで日常生活も応援しています。

やりがいを感じるのは、パウエルコーチの指導を受けた選手から、「通訳がわかりやすかったので、コーチの指導がよく響いた」と言われたときです。さらに、英語力に磨きをかけ、コーチをもっと知り、通訳者として選手たちを支えていきたいと思っています。

\*アロンゾ・パウエル：アメリカのメジャーリーグで外野手、監督、コーチを経験。6年間中日ドラゴンズで活躍し、1994-96の3年連続セリーグ首位打者。

403

## 車いすマラソンで障害者の自立支援と国際交流

### 名古屋シティハンディマラソン

毎年10月の日曜日に、名古屋の繁華街、久屋大通で繰り広げられる「名古屋シティハンディマラソン」は2019年に35回目を迎えました(昨年はコロナ禍のため中止)。マラソンといっても競技マラソンではなく、障害の有無に関わらず誰もが参加でき、1周約800メートルのテレビ塔の周りを種目ごとにタイムを競うこのイベントは、1981年の国際障害者年を契機に、名古屋市と実行委員会を中心に準備がすすめられ、始まりました。

#### ●社会に見えるカタチで

施設や病院の往復だけで引きこもりがちの人にとって、外に出て街行く人たちや通りすぎる車から声援を受けることで、社会の一員である実感と、大会に向けた目標が生まれます。主催者事務局を担うAJU



▲マラソン招待選手との歓迎会

車いすセンター(名古屋市昭和区)の入谷忠宏さんは、「マラソンは誰でも参加できるわかりやすい競技。街中で開催することにこだわったのは、障害者の姿を社会に見てほしいこと、健康者も共に走り、盛り上げていく時間にしたかったから」と話します。

ある名古屋市郊外に住む重度の障害をもつ内気で引っ込み思案な青年にとってこのハンディマラソンに参加することは長年の憧れでした。参加の誘いを受けたものの、はじめは自信のなさから躊躇していましたが、近所の歩道で練習を重ね、当日に挑みました。選手宣誓も堂々とやりとげましたが、残念ながら途中でリタイア。しかし翌年には見事に完走しました。「マラソンで夢を得た」彼は今、住みなれた地元で親元を離れ、自立生活をしています。



▲マラソン開始前にスタートの順番を待つ参加者たち(2018年)

#### ●バリアフリーの世界に向けて

このイベントは海外の障害者たちにも大きな刺激を与えています。1985年から市の助成金でフィリピン、タイ、カンボジアなどアジアの国から選手を招へいしています。母国で障害者運動の担い手になる人材育成の一環になればと、大会への参加と併せてAJU自立の家の見学などの機会を設けています。彼らはバリアフリーや障害者の「自立」の取り組みに一様に驚きます。あるバングラデシュの参加者は帰国後、障害者の自立支援団体を立ち上げたそうです。一方、入谷さんたちも「重度の障害者でも自立できることをわたしの国の人に伝えてほしい」とモンゴル選手に請われ、現地で講演や交流を続けています。

ハンディマラソンが世界の障害者をつなぎ、バリアフリーの世界を目指します。



▲モンゴルで関係者にバリアフリー化の必要性を説く入谷さん(右)

スポーツを通して、人はさまざまなことを学びます。自己を見つめ、仲間や地域、社会とつながり、そして夢や目標に向けて前に進む力を与えてくれます。

そして「だれ一人取り残さない」社会は一人ひとりが可能性を見出すことができ、自信をもって生きていける社会にほかなりません。それが、健康で豊かな生活、つまり平和な社会づくりにつながっていくのではないのでしょうか。

参考文献：「アフリカと白球」友成晋也著 / 「スポーツSDGs概論」神谷和義・林恒宏編著 / JICA広報誌「Mundi」No79 2020年4月